

第二百五十六話 複合的視点からの至当なる評価を！

大東亜戦争をどう見るか、その本質は何だったのか？ 侵略戦争だったのか、自存自衛の戦争だったのかについての国民の認識はかなり分裂している。人々は解りやすいが故に二元論に拘るが、物事はさほど単純ではない筈だし、まして国家の命運を決するような戦争を簡単に評価すべきではないだろう。断言断定的・一方的な評価は止めるべきだろう。

1 読売新聞「検証 戦争責任Ⅰ」に、2005年に行った世論調査結果が掲載されている。その質問内容と結果は、以下の通りである。

◆先の大戦については、次のような指摘があります。この中で、あなたの考えに最も近いものを、1つだけあげてください。

- ・中国との戦争、アメリカとの戦争(イギリス、オランダ等連合国との戦争も含む)は、ともに侵略戦争だった 34.2%
- ・中国との戦争は侵略戦争だったが、アメリカとの戦争は侵略戦争ではなかった 33.9%
- ・中国との戦争、アメリカとの戦争は、ともに侵略戦争ではなかった 10.1%
- ・その他 1.1% ・答えない 20.7%

2 首相談話(戦後50年、60年、70年)

(1) 村山談話(戦後50年1995年)

その要点は、「国策を誤り戦争への道を歩んで国民を存亡の危機に陥れ、植民地支配と侵略によって諸国民に多大の損害と苦痛を与えたことを反省し、謝罪を表明する。」であり、正式に、『侵略を認め謝罪した』のである。この談話は事後の歴代内閣にいわば踏み絵として機能してきた。

(2) 小泉談話(戦後60年2005年)

村山談話を基本的に踏襲

(3) 安倍談話(戦後70年2015年)

「植民地支配」「侵略」「痛切な反省」「おわび」のキーワードは盛り込まれているものの、村山談話に比しかなり抑制的・一般的表現であり、謝罪外交に終止符を打ちたいとの思いも込められていると評される。

3 複合的視点を持つべし

近年における先の戦争に関する研究の進展により、「侵略か否か」の単純な二分法ではない新たな区分が考えられるようになってきた。保坂正康氏著「昭和史の深層」(平凡社)には以下のように分けられている。(88, 89p) 確かに氏が述べるように、先の戦争を一つの論理で語ろうなどというのは土台無理な話で、様々な局面が重なり合っていることを前提に考えれば、私の言うように侵略と自己防衛を兼ねた戦争という見方も成り立つのである。(89p)

- ① 自存自衛の戦争 ② 東亜開放の戦争 ③ 典型的な侵略戦争
- ④ 強要された戦争 ⑤ 近代の戦争の清算 ⑥ 政治的決断の失敗した戦争
- ⑦ 民族解放戦争 (詳細は割愛する。)

4 戦後80年談話に対する期待

- (1) 少なくとも上述①から④を包含した認識を明確に示す必要があるだろう。勿論、軽重は在ろう。村山談話は余りにも一面的・一方的に過ぎるし、更には、それが踏み絵ともなったことは反省すべきだ。日本の政治的リーダーの問題も等閑視できない。
- (2) 少なくとも、近隣諸国に忖度することなく、冷静かつ分析的に、日本の立ち位置を明示すべきだ。
- (3) 善悪二元論からの脱却、複合的視点からの先の大戦の正当なる評価が望まれる。
- (4) 苦心・呻吟した安倍談話を踏まえ、それをも超えるような歴史的な談話を望む。

(了)